名古屋芸術大学研究紀要第45巻　161～172頁（2024）

倉橋惣三における母親観についての考察１
―「育ての心」を手掛かりとして ―

A Consideration of Thoughts about Mothers by Souzo Kurahashi 1
― Consider "Sodateno Kokoro" as Clues ―

安部　孝　*ABE Takashi*
（教育学部）

１　課題意識

これまで、倉橋における子ども観について、主に『子供賛歌』[1)]に示された童心と仏心の意味、母と子の関係、母の願いを手掛かりに検討してきた[2)]。そこでは、そもそも母子の関係は同時同在的であり、現実的な事実であり、「渾一的」であることが分かった[3)]。また、子どもに対する母の願いは、観世音菩薩の慈悲に通じる“悲（悲母の思い）”であると考えられた。それは、子どもの辛さに対する同苦であり、自身の非力をわきまえ、わが身に代えても救ってほしいという（神仏に対する）切望であった。このことから、母を母たらしめ、悲の心情を引き出した存在こそが、「ヘルプレス」な子どもであることが理解された[4)]。また、倉橋における母とは、子どもと渾一な関係性にあり、親としての心情（親心）も「子どもの生長とともに熟する」[5)]ものであると理解された。

しかし、このように倉橋は親子関係の渾一性[6)]、そして成長の相依相関性を語っているが、一方で、「家庭教育」について語り（「家庭教育行脚」）、家庭教育における母の立場やあり方について説いている。その意味で親子の関係はただ“自然的”であるとのみ考えられるものではないのである。

倉橋によれば、家庭教育は「ひっきょう親と子の間のこと」であるが、親が余りに教育的になったりする様を「折角の親ごころの自然よりも、教育的という意識や技巧が打ち勝ってしまって、親が教育的になったのか、教育的というものが親の位置に座っているのかわからなくなる」という[7)]。これらの一因には、外部から「余りに教育的に神経質になっ

１）倉橋惣三『子供賛歌』フレーベル館、1996年。
２）「倉橋惣三の「童心」についての考察１」令和3年度日本教育学会 第80回大会、「倉橋惣三の「仏心と童心」についての考察」令和2年度 日本保育学会 第73回大会、「『子供讃歌』の「弘誓の子ども」について２―母に着目して―」令和元年度日本保育学会 第72回大会、「『子供讃歌』の「弘誓の子ども」について１」平成29年度日本保育学会 第70回大会。
３）「七、我が子」『子供賛歌』、pp. 77-80。
４）「1、子安観音」同上書、pp. 182-183。
５）「七、我が子」同上書、p. 79。
６）「母ものがたり」には「天地自然の関係」との表現が見られる。倉橋惣三『育ての心（上）』フレーベル館、p. 75。
７）「母ものがたり」同上書、p. 76。

たり、（略）、科学的になったりさせられる」ことがあるとするが、いずれにせよそこには、親の教育に対する強い関心があることが分かる。つまり、教育は子どもをその対象とし、母子は相対するがゆえ、一概に先の渾一的関係として理解することは難しいと考えられる。

そこで、本研究では、渾一的、相依相関的な母子関係を踏まえつつ、「家庭教育」を行う母のありかたと意味について検討したいと考える。

2　目的と方法

倉橋惣三の母親観を、『子供讃歌』『育ての心（上）』をもとに検討する。

検討に際しては、これまでの研究で理解した倉橋の子ども観と母子関係を踏まえながら、「家庭教育」における母の立場や役割に焦点を当て、母親観について検討する。

3　内容

3-1　『子供讃歌』における母子

『子供讃歌』は、雑誌『幼児の教育』（日本幼稚園協会発行、フレーベル館発売）に、昭和24年９月号より昭和27年５月号まで、19回にわたって逐次連載された短文を、昭和29年、一書にまとめ、『子供讃歌』として、刊行（フレーベル館）したものである[8)]。いわば、「彼が自ら手を下して出版した最後の著作」「最後の心魂を込めた著作」であり、「白鳥の歌」である[9)]。内容は、格別、保育者に向けて書かれたり、保育の様子や要諦に関したりするものばかりではなく、自身のさまざまな思いをまとめたと思われるものもある[10)]。

倉橋は、「１、子安観音」[11)]において、子どもは「生長の偉大な自力がある」が、同時に「ヘルプレス」な存在であり、この世界は怖ろしいという。つまり、この世は子どもが決して生きやすいところではなく、逃れ難い苦がつきまとうということであろう。ゆえに、この事態にあって、母は、「子どものために、自己以上の力にすがらん」とし、「全身全霊を捧げた、己を以て子の幸福に代えんとさえ希う」のだという。倉橋（彼）は、このような母の願いを、辻々の「観世音菩薩」に祈る姿に見ていたのである。倉橋においてこれらの母らは、子ども（の立場、辛さ）に同苦的であり、苦を解決しようとする思いにおいて、その願いを聞き届けようとする観世音菩薩の愛（慈悲）と同等である。したがって、

8）『子供讃歌』、p. 2、参照。
9）坂本彦太郎『倉橋惣三・その人と思想』、フレーベル館、1998年、p. 153、参照。
10）坂本は、「彼はこの著もっても、暗黙のうちに、戦後の混乱や停滞でとどまっている当時の幼児教育の世界に、ほんとうに変わらない基本的な考え方を示そうとしたのである。自分たちがむかしから堅く守っていたものが、現在でもそのまま通用することを、説こうとしたのである」と述べており（前掲書、p. 154）、倉橋が教育について根本考察を求めていた姿勢を再確認し得る評価と言えよう。また、倉橋が官職を離れ、子どもと教育について、当然職務上の経験をも踏まえながらも、なお不易的、通底的内容に留意し、思想を闊達に展開した書であると考える。
11）「１、子安観音」『子供讃歌』、pp. 182-183。

母は、子であり、救いの観世音菩薩である。そして子は、母のそうした思いや姿を自然なものと（引き出）し、また母を母たらしめている根拠なる存在である[12)]。

ここで留意すべきは、倉橋はこの観世音菩薩への祈りを妙法蓮華経の観世音菩薩品を参照しながら、観世音菩薩と母と子の思い（精神）や働き、関係性について記述していることである[13)]。彼は、観世音菩薩の力、特に「身を三十三種に現じて、相手相手の姿になり、衆生の身近に再度の手を伸べられる」ことに着目している。そもそも、母と子どもの関係は前述のように渾一的であるが、独自のものであり、同じ存在や関係はあり得ない。したがって、母は一人の親であっても、何人かの子どもがいれば、一人一人に応じた対応を、自身の子どもとして分け隔てなく為しているのである。それゆえ、その母の願いを聞き届ける観世音菩薩はその様々な（多様な個性、個別の）母子を救う必要があるのであり、彼は、この観世音菩薩の衆生に応対する態度（精神、役割）に、しばしば母子、子どもに対応する自身や保育者の姿を准え、また理想としているのである。

たとえば、母（子どもとの関係性に立った存在）に対し、観世音菩薩のような眼差しをもって接しようとする倉橋の言葉は、「家庭教育行脚」に次のように記されている。

> 「母は教える前に慰むべき人である。導く前にいたわるべき人である。家庭行脚の心は説く前にまずいたわることである。戒める前にまず察することである。…（略）…。どの母でも、その子の母である。家庭教育行脚の要諦は、その母にその子の母たる喜びと幸福とを感謝せしめることにある。…（略）…。すべての母は悲願の母である。その悲願もまた、その母子、決して同じくない。それに対し、もとより観音三十三種の化身はかなわずとするも、すべての母の哀思の一つをでも救う一助となりたいのが、凡力行脚の念願である」[14)]（下線、著者による）

倉橋は、どの母にも“母であること”、つまり、「その子の母である」ことの幸福感を味合わせたいと考えている。味合わせるとは、実感させることを意味しており、それがどのように為されるかは示されていないが、そうあることが望ましく、そうあるべきと考えられている。

倉橋における何かを感じ取ること・そのような感じを味わうことという考え（望ましい認識、心の状態についての見解）は、好意への「良導体」という考えに通じるものである[15)]。そのためには、まず人が良導体たり得ること、つまり、母自身の感受が「感謝」へ

12）この意味でも、渾一的ということができる。

13）森上は、倉橋の信仰について「惣三が内村鑑三という人（こころ）を介してキリスト教の思想に影響を受けながらも、それはあくまで頭で理解した理屈であって、真の信仰を獲得するには至っていなかった」ことを推測している。私たちには、神仏や各人の信仰（心）そのものを明確に述べることは難しい。倉橋についても、またキリストや観世音菩薩についても同様である。しかし、どのような教えによって影響され、どのように語っているかを手掛かりに彼の信仰や神仏への考えを推察することは可能であろう。

14）「家庭教育行脚」同上書、pp. 147-148。

15）「かく育てたしと思うこと」『幼稚園雑草 上』、フレーベル館、2008年、pp. 242-261、参照。

と昇華する（または、感謝の思いという感受が考えられる）ことが必要になる。このことは、人は、どのようなときに何に対して、感謝する恩恵（恩、または働き）に気付き得るのかという人間の内面の根本問題であり、まずもって、我が子のために祈る自分があり、我が子によってその心がもたらされたことによる気付きを求めているのではないかと考える。それは、同時に自身の心に優しさや懸命さ、かけがえのないものへの必死さ、注ぐべき愛情のあること、それを実際に為していることを自覚させてくれた存在に対するありがたさの感受（気付き）である。

時として私たちは、愛情をかけている自身を自覚することはあるが、それは何によって引き出されたのかという働きや存在への留意は不十分であると言わざるを得ない。また、大変であるがゆえにその直接の原因たる子どもを憎んでしまうことがあるかもしれない。倉橋は、およそ後者にならぬよう、母を指導するのではなく、感受や気付きの機会や条件を与えるべく、労わり慰めることを大切にしようとしたのだと考えられる[16)]。

私たちは、子どもを次の成長段階・次元に育て上げることに教育を傾注する。とりわけ母は、我が子として、また、学童、生徒（園児）としてのそのことに力を尽くさなければならず、保育者や教師よりも先にあげたリスクの場面が多くあることになる。倉橋の、母に対してまず思いやるべきことの態度は、こうしたリスク回避への手掛かりともなり、母子を守る（救う）基本ともなるのだと考えられる[17)]。

母、母子はどのような状況下にあっても現実生活の中にある。私たちは、生きており、それは生活していることに他ならないのである。

しかし、私たちは必ずしも理想の実現のために理想のように生活するのではない。倉橋は、母子は千差万別であることを認めつつ「人間性の根本」の違いがあるのではなく、「家庭教育はひっきょう親と子の間のこと」であると述べており[18)]、それを踏まえれば、まず、ある根底のことがらと個別的具体との両方を見極める必要があるのであり、母子の諸相は良し悪しのみならず、一旦、まま理解（受け止め）されなければならないことになる。実際に倉橋は、「教育より漁の方が生活ですから」と、母子もまずそこに生活している（生きている）ことを認め、決して待たせられたことや場の騒がしさを理由にして「人

16）観世音菩薩普門品を収める法華経（妙法蓮華経）は、衆生（人々）に遍く仏種の存在を認める。それに気づくことができれば衆生の生き方は大いに変わるはずであり、妙法蓮華経に描かれた菩薩の役割には、衆生への働き掛けを表すものがある。教説的には、（衆生、）母子も幸福になる可能性を自ら信じ、幸福をもたらす存在・働きを感じ取ることができ、安寧を得ることになるのである。倉橋による母子と観世音菩薩の関係について、観世音菩薩品を手掛かりにすればこのように解釈することも可能である。しかし、倉橋はこの教義的な解釈を深く行っていない。その理由は明らかではないが、観世音菩薩が単独で信仰の対象として民間に広まっていることから敢えて説明を省いているとも考えられる。なお、倉橋は「好意の感受性」について親鸞や法然の思想を基に考察しており、理論や教説などに拘泥しない人間の本性、自然性について仏教思想を参照している点に留意したい。

17）本論の趣旨ではないが、母（親、大人、保育者や教師）が子育ての意味を子どもとの関係性からとらえ直し、自身における子どもの意義を感じ取ることは、母子（大人と子ども、また各自身）にとって有意義なことであると考える。

18）人間性の根本は同じであると解釈する。

間の根本」を問題にすることはなかったのである。

子どもを育てることの現実課題は外部の者が考える教育や実践理論を展開することではなく、まさに現実生活の展開の内にある。それは、親と子による生活実感でしか（理解し得）ないのであり、その意味で、子育てや教育のための教育論や宗教的教説などは、特別の必要から求められるものでしかないのである[19)]。

倉橋にとって、現実生活の中の子育てや家庭教育とは、「家庭教育行脚」において出会った漁を営む家族や親子に見られた、まさに生活が先立ち、非日常的な学び（倉橋による講演）の中にあってさえ子どもと共にあるという状況である[20)]。

「家庭教育の話どころじゃありませんね。子どもらは、どうしています」

…（略）…

「鯵は、家庭教育の集まりのあることなんか知りませんよ。ハハハハ……」

…（略）…

「子どもたちもわめいていたが、そのうち前列の二、三人が、母の膝に頭をのせて眠りだした。…」

…（略）…

「あの待っている間こそ、私の仕事だったのでした。教育より漁の方が生活ですからね」

倉橋の言葉にある「家庭教育の話どころ」ではないことが生活の実際であり、安心を得たのちに「母の膝に頭をのせて眠りだした」子どもと母の姿こそが倉橋が求めたもの（それまでも意識していたものか、そのときに腑に落ちるように理解したのかはわからない）であったのだと考えられる。無論、そうした家庭の様子（子育てをしながら生活する姿、家庭で培ってきた子育ての姿）を壊すことなく、「待っている」倉橋の思いは、その安寧（の状態）の実現を心から望む母や観世音菩薩に准え得るものであると考えられる[21)]。

倉橋の眼前の、母の膝に頭をのせて眠る子どもの姿は、見方を変えれば、眠る子どもの頭を膝に抱き、心穏やかにして子育ての話に聞き入る母の姿でもある。親たちは、子育てをしながら、子どもと一緒に子育てを学んでいるのである。倉橋はこのような母の苦労を一生懸命に労わり、報いようとし、そのためにも、観世音菩薩の三十三の化身には及ばずとも様々に救いの手を差し伸べたいと考えたのである。そして、今、眼前の親子に必要なことは（もしも観世音菩薩のように与えることができるのならば）、結局、穏やかで安寧な渾一が、**まま**保たれることであると倉橋は考えたのではないだろうか。

観世音菩薩品によれば、子どもと（共に）あることにおいて母はすでに救われていると

19）宗教的教説とは、**教説そのもの**であり、その人が生きるために必要とする信仰心とは異なる。

20）「家庭教育行脚」『子供讃歌』、pp. 136-148。

21）本来ならば倉橋を待つ母親のために、実際には倉橋が待っている状況である。彼にとってこの時間は、教えたり、責めたりすることなく労わる時間であったと思われる。ゆえに、母にとって倉橋の話はただ慰められ、苦労が報われる話（時間と場所、場面）でなければならなかったのである。

考えることができる。なぜなら、観世音菩薩の三十三種の化身には、「童男身」「童女身」があり、観世音菩薩が“その子”である（ことがある）からである[22]。このことについて、塩入は次のように述べている[23]。

「童子、童女に身を変えて現れることなど、私たちはじっくり考えて見るべきでしょう。よく『子供に教えられた』などと言いますが、目の前にいるひとりの子供でも、観音菩薩の応現かもしれません。その子を通して菩薩は、何を私に語りかけてくれるのでしょう。」

これらを踏まえ、観世音菩薩品の意味を参照すれば、倉橋にとって母親とは、子どもと渾一的存在であり、一人の母をしてその子ども（ら）と切り離して理解することはできない存在であると考えられる[24]。そして、生活の中で子の母であること（現実的な喜びだけとは限らないが、それも含めて母である喜び）が実感されるよう、慰められ、労わられる存在であると考えられ、このことがまずもって家庭教育の必須要件となると考えられる。

3-2　家庭教育における普遍…人間の根本、母の生地、人間生活の地

倉橋の母親観については、『育ての心』の「家庭教育問答」や「母ものがたり」、そして、実際に彼が出会った様々な母たちの姿を描いた『子供賛歌』の「家庭教育行脚」に見ることができる。

倉橋が文部省社会教育官の立場で家庭教育行脚を行ったことに関して森上は、「当時の教育体制の下にあってそうしたイデオロギーに部分的に与する役割を果たしたこと」を認めつつ、その評価は「現在の視点のみから行うべきではなく、その当時の歴史的、社会的な枠の中で、どれほど先駆的な役割を果たせたかどうか」にあるとしている[25]。しかし、前述の倉橋の記述からは格別、先駆的な役割というよりも、いずれの親の姿をまま認め、慰め、労わる受容的、肯定的な側面がうかがえるように思う。

当時、倉橋が「家庭教育」を説いて接した地域や人々の生活がどのようであったかは、

22）三十三種の姿…三十三身①仏身、②辟支仏身、③声聞身、④梵王身、⑤帝釈身、⑥自在天身、⑦大自在天身、⑧天大将軍身、⑨毘沙門身、⑩小王身、⑪長者身、⑫居士身、⑬宰官身、⑭婆羅門身、⑮比丘身、⑯比丘尼身、⑰優婆塞身、⑱優婆夷身、⑲長者婦女身、⑳居士婦身、㉑宰官婦女身、㉒婆羅門婦女身、㉓童男身、㉔童女身、㉕天身、㉖竜身、㉗夜叉身、㉘乾闥婆身、㉙阿修羅身、㉚迦楼羅身、㉛緊那羅身、㉜摩睺羅伽身、㉝執金剛身　※㉓、㉔が子どもの姿。『大法輪 平成十二年一月号』、大法輪閣、2000年、pp. 90-91、参照。

23）塩入法道「特集『法華経』のすべて 主要各品の教えとキーワード 観世音菩薩普門品 第二十五」『大法輪 平成十二年一月号』、大法輪閣、2000年、pp. 90-91。

24）母子を渾一の関係性、それぞれの相依的な立場について、『育ての心（上）』「母の誕生・母の成長」（フレーベル館、1993年、pp. 70-74）に倉橋の考えを見出すことができる。「母も常に、子から血肉を享けているのである。わが子に与えるばかりでなくわが子からもたえず与えられているのが母である。子も生まれ、母も生まれ、子も育てられ母も育てられる。なんにも変わった事をいっているのではない。思えば嬉しさが込み上げてくるような真実である。」

25）森上史朗『子どもに生きた人・倉橋惣三の生涯と仕事（下）―保育・家庭教育・児童文化―』フレーベル館、2008年、p. 152。

彼が実際に出会った人々の姿や様子の記述から知ることがふさわしいのだと考える。そこには、彼が好感を抱いたか否かでの２つの側面によって描かれていることが興味深い。

先述の、実生活的な親の様子を描いたうえで、あえて倉橋は「c 苦 手」と見出しを設け、「上流マザーとインテリ・マザー連の集まり」が苦手であるとしている[26]。これらの母たちは、先述の漁村の車屋さんや下足番のばあさんや庶子の母などと対照的に描かれている。倉橋は、母の苦労や謙虚さ、本念をもって感受されるものであるという母親観につながる教育論を展開しており、一方で、苦手とする母たちは、感受性という実感的理解ではなく、書物の文字や理論による理解が先立つ人々である。倉橋自身もそうであるがゆえに、いかにしてそれを解決（「包装が破られる」「母の生地にかえす」と述べる）すべきか苦心しているということが、「苦手」を意味するのだと考えられる。

実際、彼は漁村の母たちとの出会いを、自身の「包装」が破られる機会ととらえているが、全ての母たちに彼の理想を伝え、為す（為させる。成就させる）ことは現実的には困難である。なぜなら、上流マザーたちは決して倉橋の話を理解できない人々ではないであろうし、彼が言うように、やはり母として「我が子をよく教育したい」という心をもっている。つまり、「人間の根本」、母として通底する思いは確固としてあるのであり、彼女らもまた教える人たちではなく、労わり、慰めるべき人たちなのだからである。

結局、倉橋にとって最後に（『子供讃歌』で）描いた母子観は、理論や書物の文字の届かない、それらとはかけ離れた、また、縁遠い実生活に身を置いた母子をも十分に回収し得るものであり、様々な理論や諸説をさえ包摂する人間生活の「地」に広げられ、敷かれたものという認識（イメージ）ではなかったかと考える[27]。

3-3 「母ものがたり」…「家庭教育問答」「まむき よこ顔 うしろ姿」「愛育方針の家内統制」

本来ならば、倉橋は、あるべき姿や心構えなどを、あまり母に向かって述べることを本意としないのではないかと思われるが、生活の中にある母の悩みや煩わしさを想定し、示唆を与える文章がある。うち、３つ取り上げ、倉橋の母親観を検討する。

(1) 「家庭教育問答」[28]

本節は、主客問答の形式で描かれているが、あくまで倉橋が家庭教育の要諦を説いたも

26)「家庭教育行脚　c 苦 手」『子供讃歌』、pp. 145-146。

27) 彼の思想的な鷹揚さ、柔軟な包含性が育まれた契機の一つであったと考えられる。倉橋は、講演対象として「上流マザーとインテリ・マザー連の集まり」が苦手であったことは述べているが、自身も彼女らのように知識や理論が先に立つ親であることを認めており、「包装」の内に在ると自覚している。しかし、彼が出会った漁村や満鉄沿線の母などは、到底「包装」の内には収まらず、むしろ彼女らは知識や理論にとらわれずに生活の中で子どもを育てている。こうしたさまざまな姿をとらえた上で倉橋は、「歴史的社会的の異」が存在しても、「人間性の根本の別」はないとし、それは「共通の中に、伝統的慣習の相違」であると述べている（「家庭教育行脚」『子供讃歌』、p. 137）。

28)「家庭教育問答　母ものがたり」『育ての心（上）』、pp. 105-114。

のである。

客は、家庭教育についての自身の考えを、いくつか主（相談を受け回答する。倉橋自身と考えられる）に窘(たしな)められる。このときの客の思い込みに対するあるべき家庭教育の考え方は次のとおりである。なお、やり取りの中で、教育の意味となる「生活即教育」を客に確認させ、それに対して自ら、同義となる「生活即生活」を与えている。ここで倉橋が、「生活即生活」を後に述べているのは、教育が人間形成に役立つものであれ、それは人間自身が生活していくことの内側にあり、教育が生活に生かされていくことが肝要であることを示したものであるからと考えられる。また、倉橋が教育者である立場を意識しているならば、教育（による影響、成果）こそが内側から「包装」を破って生活へと展開していく力とならなければならないことを示唆したものであると考える。

「……、家庭生活が子どもに与える教育をいうので、理屈っぽく申しますと、家庭生活そのものが持っている自然の教育効果を実現するということではありますまいか。」

「しかし、学校には現実の生活がありませんね。…（略）…、それを充分に学校に求めることは困難でしょう。ところが、それが、家庭にはあるんです。現実の生活が。家庭というのは、家でも、また庭でもなくて、生きた生活なんですからね。」

「しかし、実感なしの人間、実感なしの生活では、生活の教育も、人間の教育も出来ますまいね。」

ここでは、倉橋は、学校を「教育だけの場所」とし、生活の場所を家庭と位置付けて、学校には「現実の生活がありません」と述べる。つまり、学校は教育即生活を満たし得ず、不十分な場となる。その理由は、本節で明らかにしていないが、本稿におけるこれまでの考察に鑑みれば、学校が家庭ではないことはもちろん、学校では母子の渾一の関係は重要では無く、子どもは「生徒」という存在として「包装」されている状態にあることを述べているのではないかと考えられる。つまり、倉橋は、家庭の母子の現実生活における実感を認め、家庭生活と母（家族）こそが「人間の教育」を為すことができるとする一方で、そもそも、（客の考える教育をなす）学校には、生活的、実感的な教育成果を十分に認めていないとも考えられる[29]。

⑵ 「まむき よこ顔 うしろ姿」

倉橋は、家庭教育では、一人の母の姿として、「まむき、よこ顔、うしろ姿」の「三様の態度」を重視している。それぞれが与える子どもへの影響、そこに包含される自然な教育の力を説いているのである。

「まむき」は、子どもに、我が子として何よりの喜びであり、「自分でなければ与えられない親というもの」を与える。また、家庭生活に勤労する、いわば生活の事実の裡に没頭

29）倉橋は学校教育を否定するのではなく、現状の足りない点を強調し、一方で、家庭や母が子どもの生活をおろそかにしてしまうことを懸念しているのだと考える。

する母の、もっとじみな、少なくも容づくらない「よこ顔」は、子どもに「あまえてゆきたい懐かしさと違った、力強い、張りのある懐かしさ」を感じさせる。そして、「うしろ姿」は、「後からくるものを導かないまでも促す力をもち、促さないまでも力づける」とする[30]。

こうした母の様々な姿はあえて計画されたり、教育方法として駆使されたりするものではない。先述の母子の渾一的関係と母における「わが子のためが自分のためになる」ことを踏まえれば、三態の姿が適宜、子どもに与えられたとき、（母の姿に対する子どもの姿によって）母は子どもの心もちを自身の内に感じるのだと考えられる。

ただし、家庭教育で多く行われている「まむき」では、これが最良と考えて為されても、「子どもはいつも顔を垂れ目をふせている」から、親のまむきを見ていないことがあるという。つまり、いかに教育的効果を図ろうとも、子どもの「何よりの喜び」になり得ないまむきは、教育の意味をもたないのである。倉橋は、日々の生活の中でまむきを求める子どもの気持ちを次のように拾い上げている。

> 「実際子供は親の向きを求める。どうかすると抑えきれない強さにその要求が湧いてくる。親が恋しいのである。…（略）…。……別段何の隔てがあるというのではないが、子どもの心としては、もっと付かせてほしい。触れたい、接したい、まむきを与えて貰いたいことが屢々ある。それも何必要あってというのではない。ただ純粋にまむきを合わせたいのである。此の心もちを、親を占有したい心ともいったりするが、それは言葉が強すぎる。…（略）…。つまりは、親のまむきを自分の方へ向けて貰いたいのである。」[31]

子どもは母のその姿を見るが、倉橋によれば、この三態の姿は「我が子の心」に映るものであるという（傍点、著者による）。直接的な表現や言葉かけはまむきが一番適切にできると考えるのであろうが、いずれにせよ、およそ、ここで重視されるのは子どもの感受であり、母の姿、言葉、しぐさ、表情などがどのように子どもの内面に触れ、応え、心もちを引き出したかということと言える。

さて、倉橋は、「母によって、それぞれ此の三つの態度の所有され方に差異がある」として「其の人にあることであるから仕方ないというものの、それによって、家庭教育としての結果が異なってくる」ことを認めている[32]。通常、教育は子どものために為すものと考え、多くの親たちは家庭における教育としての家庭教育のよりよいあり方を知ろうとするが、倉橋は、まず子どもの心もち、心の琴線をどのようにつま弾くかを、親の課題として提示しているのである。それは、母子が渾一であり、それゆえ、母子の心もちもまた一つのもの（一体）であるからである。

30）「まむき よこ顔 うしろ姿」同上書、pp. 119-127。
31）同上書、pp. 121-122。
32）同上書、p. 127。

この三態の説では、実に具体的に母の姿が描かれている。そして、子どもの様々な心もちも語られている。それは、「親なのだから、子どもの今の、その気持ちが、わがことのように分かるはずだが」という問い掛けであり、同時に、子どもに対して真正面に開け広げられた姿のイメージの提示は、包装による隔てから解放された母子のつながりを感じ取らせるものではないかと思われる。

⑶「愛育方針の家内統制」

「子も生まれ母も生まれ、子も育てられ母も育てられる」は、母子関係が渾一であることを示す。よって母の生活では、「わが子のためが自分のためになる」のである[33]。倉橋における教育は生活であるから、子どもの教育は、生活（生きていること）において即、自身を教育し、育てるものであるといえる。子どもの成長にとってこの関係性は絶対であり、知識も経験も豊富な祖母の関与にさえ、（孫の母は）「あなたのお嫁さんだが、お孫さんにはお母さんである。絶対のお母さんである」ことを示し、子の母はその子の愛育に対する「愛の責任感」をもつ存在であると意味付けている[34]。

つまり、母は母子において渾一であるが、同時に関係として、父、義父母との関係をももつことになる。そして、子どもは孫として祖父母（前述、義父母）との関係をもつことになる。このように家庭教育に関与する人間が増えるほど、様々な「教育」（の意思）が生じるが、倉橋は、子どもに関わる人手の多い環境によって、子どもが「幼い頃には努めて単一な一定の方針の中に育てられないと性格の確定ということがついにできなくなる」とし、母の責任の重要性を示している[35]。時として現実には、外部の様々な人々の多用な教育方針や方法の存在は、家庭教育を母子の間のことに留めては置かないものであるが、意見の不一致が生じた場合には、子どものために（自分のためにではない）「母は母としての立場を守らなければならぬことがある」とする。この母は、無論、渾一の子どもと同体的に理解されるであろう。しかし、倉橋は経験の浅い母を万全とばかりにはとらえておらず、「我が子のためにどうしても譲られないことを譲らないようにするための平静からの用意」が必要であると述べている[36]。

倉橋は、家庭教育について、実生活それ自体の裡に存在する教育を重視している[37]。したがって実生活が穏やかさを損ねてしまい、母が辛くならないよう、特に幼い子どもの教育にあっては、前述の必要以上の母以外の関与が「家庭生活の真実さ」を損ねてしまわぬよう配慮している。あくまでも母子の渾一を第一義に据え、母の苦労を察し、それを慰

33）同上書、p. 74。
34）同上書、pp. 90-91。
35）同上書、p. 97。
36）同上書、pp. 92-93、参照。
37）森上、pp. 123-136。志村聡子『一九三〇年代日本における家庭教育振興の思想―「教育する母親」を問題化した人々―』三元社、2012年、pp. 33-72、参照。

め、苦労を乗り切るべく工夫をも助言しているのである。

４　考察

家庭教育を考える上での歴史的、社会的な問題については、倉橋自身も認識している。そこに立ち上がる枠とは伝統的慣習の異を指し、私たちは、それらを知ることによって普遍（＝「その根にある同じものの深さ」）で、変わらない「親子の情」を知ることができるという。

また、倉橋は日本の家庭教育の欠陥について、「家庭教育というものの普遍の人間性の発現の上に歴史的社会的なくもりとかたよりがあること」に留意しており、眼前の家庭教育が被る歴史的、社会的な影響や制約を理解しつつも、むしろそれらにとらわれず、さらに普遍に至るための深い理解に努めていたのである[38]。無論、倉橋自身、現実的な異を、行脚によって接した様々な親たち（漁村、山間、四国のある町、上流マザーやインテリ・マザー、満鉄沿線の家庭等）の姿から実感していたと考えられる[39]。そして、その上で哀思を抱くいずれの母も、「その子の母」たる喜びと幸福とに感謝するようになることを望んだのである。

倉橋が「苦手」とする母たちは、倉橋の話を「感受」するのに必要な「母の苦労や、母の謙虚さ、母の本然」が足りないインテリ癖のある人々であった。そして、倉橋がその人々に触れさせることが難しいと感じた「母の実感」とは、その子の母であることの喜びと幸福、それらへの感謝の心情であるといえよう。しかし、祈る母にも、インテリ癖のある母にも、相談に訪れる母にも苦労や悩みはあり、だれもが子どもや子育てのことを真剣に考えている。当然、すべての母、子、母子（関係）、母の三態の姿、家庭教育の実態は異なるゆえ、「母の実感」も異なることになり、理想の家庭教育や母親像などを掲げること自体が不可能であると考えざるを得ない。

このように考えると、倉橋自身、それがいかなる内容にせよ（実感的で生活的を尊重するにせよ、理論や書物の文字に拘るにせよ）、一々の現実の母子を一つにとらえ、語ることは困難であると考えていたと推察することができる。倉橋自身が、観念や理論を愉しみ、書物や文字の包装の持ち主であることを先の母親たちと並べて自認しており、様々な母子、家庭を知ることで、倉橋は“親の実感”を真に自覚し得ない（していない）と考えたのだと考えられる。結局、母親像や教育観は、ある一つに収まる理想ではないがゆえに、個々に母子を受け止め、まま生かすもの（存在や考え＝観世音菩薩のような存在、観世音菩薩普門品）が必要だったのではないかと考えられる。結局、異に溢れる現実の生活において「母の実感」等の普遍は理解し難いと考えられるが、母子の存在を現実生活の中で損

38）「家庭教育行脚」『子供賛歌』、p. 137。
39）同上書、pp. 136-148。内地と満鉄沿線（異国）の家庭教育の自由と規範の問題に、家庭間（母親による）の違いの大きさを感じ取っていることに留意したい（pp. 146-147）。

なったり、失ったりしてはならず、まずは生活を守り、母子の生を認め、労わる必要がある（これらは、育てると表現することが可能である）ことは、倉橋の思想の根本原理と言えよう。

ところで、母の三態の姿とは、子どもの多様な姿への対応ではなく、母の現実生活における子育てや教育の途であると考えることもできる。観世音菩薩の慈悲に譬えられた母の愛は、多様な子どもの姿に対する細やかで行き届いた対応としてもたらされたが、三態の姿は、むしろ子どものその時々の感受（その時々の心もち）によってこそ、普遍の意義が与えられ、役割を果たすことができるのではないかと考えられるからである。したがって、私たちが母の悲願に気付き、母を労わるとき、子どもにおいて大切なのは、母の悲願を感受すること、すなわち、気付くことであるといえよう。つまり、この意味からも倉橋における家庭教育にとってそれぞれの母子の家庭生活が重要なのであり、教育の本質とは生活における実感（感受）である（そのような人間の形成）と言えるのである。

以上から、倉橋における母（子の母）は、子どもと生活し、子どもの心もちを引き出し、また応え、人間として大切な感受性を育む存在である。そして、時として子どもを取り巻く環境と折り合いを付けながら母として子どもを守り、同時に自身が子の母であることを保つ存在であるといえよう。

（了）